

J **apanese text**

2013年 秋/冬号 日本語編

インタビュー

アーティスト・インタビュー

OHGUSHI

—計算され尽くしたにじみで描く「美人画」

写真=菱沼勇夫
文=オオスキトモコ

p.119

筆と墨を使い、和紙に「美人画」を描くアーティスト、OHGUSHI さん。その作品はモダンでファッショナブル。日本国内にとどまらず、エミリオ・プッチ、クリニークなど海外のファッション、化粧品ブランドの仕事も手がけ、国際的に活動している作家である。

OHGUSHI さんは色絵磁器「有田焼」で有名な、佐賀県有田町の出身。絵を描くことが好きな子ども時代を経て、有田工業高校デザイン科に進学。イラストレーターを目指すようになる。高校の頃はリキテンシュタインに憧れ、太い線とベタ塗りで女性の絵を描いていた。

現在につながる、墨と筆で描く技法を発見したのは、20歳の頃だった。「墨」という細かい粒子のにじみ、どこまでも引き続けられる線、そしてそれを受け止める「和紙」という存在に魅了された。自分が求める美しい女性を描くためには、誰かの模倣では不可能で、「筆、和紙、墨の特性」が不可欠なものであるとその時、確信したという。

福岡で活動したあと上京し、ファッション雑誌のイラストを多数手がける。その後フランスに渡り、滞在していた3ヶ月間で、フランスからイタリアまでを営業に回った。結果、2004年にフランスのモード誌「TWILL」に日本人で初めて特集される。それが日本に帰ってきてから評価され、ファッションブランドなどの広告の仕事が増えたという。

彼の作品に見られる流麗な線や、にじみの表現は、一見感覚的で、偶然に頼る手法に思えるが、実際は緻密に構築された作業の積み重ねである。

「だるまの目を一つ一つ入れていくような……」と職人の技

術でたとえる。顔の作品であれば右目、左目、鼻などの各パーツごとの描き方を練習用の和紙に描き、作業の手順書を作る。描き方を体に覚えさせてから、本番の和紙に手順書に準じて清書する。

「右目、左目、鼻……とその作業を繰り返し、もし唇で失敗したらそれでまた一からやり直します」

その時の伝えたい要素を表現するために何枚も描いて技を練り上げ、その技を再現出来るのはたった1枚だけ。瞬間的ではあるが、その瞬間のために積み重ねた時間は膨大である。

2008年に1年間にわたり手がけた伊勢丹の広告イラストレーションの仕事は、今までの仕事で一番達成感があったものだという。「この時に、それまでの作品と全く違う、アクリルガッシュの鮮やかな色彩のにじみを全面に押し出した『粒子』の技法を発見しました。『美人画』という成功例を打ち破り、それまでに築き上げた名前を変えてもいいという覚悟で編み出した技法を、爆発させた作品たちです」

現在に至るまで「美人画」、「粒子」、女性の唇を描いたシリーズ「LIPS」など、いくつかの独自の技法を行き来しながらキャリアを積んでいる。現在は、墨の可能性を探っているところだという。

「最近揃えた墨は、ある書の作品集を読んだとき、どうしたらこの線のように筆の形跡を残しつつ、にじみを生じたまま描けるのか? と思い、その作品集を持って書道具の店へ行き、相談しながら購入しました。彼の道具や技法の研究、模索は終わらないようだ。

これからの目標は、日本古来の道具を使いながらも既存の美人画の概念を塗り替え、新しい「日本の美人画」の世界基準を作ること。自分の作品がアートであるかイラストレーションであるかは、あまり意識していないという。「自分が本当に本物であれば、周りの評価が変わっていくはず。自分の作品がアメリカやフランスの美術館で、ずらっと並んでいるイメージがある。それに向けて作品を作っています」と確信的に語った。

www.ohgushi.jp

いさお
富田 勲
—音楽とは“音の塊”

写真=菱沼勇夫
文=工藤素太郎

p.120

2013年7月14日午前4時30分、まだ夜明け前である。少し明るくなり始めた、この時間に81歳の富田勲さんは幕張メッセのステージにいた。日の出の時間帯にだけ地球に降り注ぐ磁力線をキャッチすることによって得られる、鳥の鳴き声のような音、ドーンコーラスを織り込み、富田さんのシンセサイザーと生のトランペットやギターを加えた新しい音響を生み出そうという試みが始まるようになっていた。幸い天候に恵まれ、夜明け前という時間帯にもかかわらず、多くの観客が集まった。

すべての楽器は自然現象をキャッチしたことが起源で、さまざまな趣向を凝らして、現在の形と音が作り上げられている。打楽器は叩くことで、弦楽器は弾くことで、管楽器は吹くことで、空気を震わせる。雷やドーンコーラスのように自然界に存在する電気というエネルギーをうまく手なずけて、自分の思うような空気の振動に変える。シンセサイザーとはそういう楽器であると富田さんは考えている。

富田さんが音響に興味を持ったのは5歳の時だった。きっかけは父の仕事の関係で北京に住んでいた時に出会った回音壁である。湾曲した城壁が作りだす音響で、勲少年は音の聞こえ方のおもしろさを知った。大人たちは忙しく、周りに友達もおらず、ひとりで過ごす時間に、音響への興味を深めていったという。

蒸気機関車の汽笛、飛行機のエンジン、風や雷など自然現象、さまざまな音がどのように生まれて、どのように伝わるのか、何かに反響して聞こえてくる仕組みを知りたかった。「雷も風も、生命の危険につながるのだけれど、子供は無鉄砲で無責任で、何にでもワクワクする」

実際、エンジンの音から上空の飛行機がどこにいるかを知ることは、空襲の時に自分の身を守るためにも必要なことだったという。

では、音楽に対してはどうだったのか。戦争中、西洋音楽が禁止されていて、軍楽隊のオールユニゾンのプラスバンドや文部省唱歌くらいしかなく、音楽には興味を持てなかったという。音楽らしい音楽との出会いは、戦争末期にラジオから聞こえてきた米軍放送だった。地域によって、日本近海に近づく軍艦に向けた放送が聞こえることがあったようだ。ラジオの雑音にまじるドーンコーラスを初めて聞いたのも、この頃である。

ラジオから聞こえる音楽からは、メロディーよりも音の色彩を感じた。軍楽隊と同じ楽器を使っているはずなのに、どうしてここまで違った音になるのか。特に強く惹かれたのが、ストラヴィンスキーやラヴェルなど20世紀の現代音楽だったことは、後から知った。『春の祭典』の、地の底から湧き出る炎のような、エネルギー感を感じ、どのように作られているのか。構造が知りたい。ここで、音響と音楽とが結びつく。メロディーだけならモノラルでも聞けるが、音楽という音の塊がどう聞こえるか、それには音響という要素が欠かせない。

高校生の頃に作曲家を志すようになり、独学と個人教授で作曲を学んだ。大学は美学美術史を専攻し、音楽学校での専門教育は受けていない。このことが既成概念にとらわれない、音楽と音響についての自由な発想につながっているという。

“既成概念にとらわれない”ことは、シンセサイザーともつながっている。

「画家は、パレットにさまざまな絵具を使って、自分のイメージする色をつくることができる。でも、音楽家は既成の楽器の音に縛られてしまう。行き詰まりを感じていた時に、シンセサイザーと出会った。自分のイメージする音をつくることのできるシンセサイザーは、音のパレットなのです」

例えば、富田版「Jupiter」は宇宙のどこかでコンサートが行われているというイメージを表現する音を、シンセサイザーで作ったのだという。

初めてのシンセサイザーを1970年当時の1000万円(消費者物価指数で換算すると2012年の約3000万円相当)で

購入したため、作曲活動を休んでシンセサイザーに専念するわけにはいかず、音のパレットでイメージする音を作るには、睡眠時間を削って試行錯誤を繰り返すしかなかった。こうして創り上げたのが、ドビュッシーのピアノ曲を編曲した『月の光』(SNOWFLAKES ARE DANCING)である。シンセサイザーを手に入れてから1年半近くが過ぎていた。1974年にアメリカで発売されたレコードは全米クラシックチャートの1位を記録し、その年のグラミー賞にもノミネートされた。これによって、「シンセサイザーアーティスト・富田勲」が世界に認知されることになる。その後、『展覧会の絵』『火の鳥』『惑星』など世界的にヒットしたシンセサイザーアルバム制作、立体音響によるサウンドクラウドといったイベントにより、音楽・音響をリードする活動を続けてきた。

2012年に発表した『イーハトーヴ交響曲』は、富田さんが少年時代から愛読してきた詩人で童話作家の宮沢賢治作品の世界を音楽として表現したものである。宮沢賢治が独特のオノマトペを駆使しながら描くのは、現実とも幻想とも受け取れる不思議な、イーハトーヴと呼ばれる世界である。富田さんは子供の頃に読んで、感じた印象をもとに作曲したという。シンセサイザー、オーケストラ、児童を含めた混声の合唱のほか、新たな試みとしてヴァーチャル・シンガーの初音ミクが加わった。「イーハトーヴの世界を表現するのに、異次元的なキャラクターが必要だと思った。既成の演奏会の枠組みを超える存在、それが初音ミクだった。初音ミクは文楽の電子版。文楽の人形が、生身の人間が演じるよりも、観る人に強く訴えるのと同じです」

初演の好評を受けて、『イーハトーヴ交響曲』は今年9月に、日本各地で再演が行われる。子供の頃から親しんできた宮沢賢治のオノマトペ、富田さんが常に追求してきた既成の楽器で得られない音、生身の歌手では得られないパフォーマンスが織り込まれた『イーハトーヴ交響曲』は作曲家・富田勲の集大成と言えるだろう。

columbia.jp/ihatov

9月1日 愛知県芸術劇場大ホール(名古屋)
 9月15日、16日 Bunkamura オーチャードホール(東京)
 9月21日 オリックス劇場(大阪)